



徳島文理大学理工学部
計算機統計学
山本 由和 准教授

研究者として、様々な刺激を受けた かけがえのない3ヶ月間でした。

私は、平成22年度研究者交流促進プログラムに参加しました。研究期間の3か月間(平成22年7月1日～平成22年9月30日)は、統計数理研究所に滞在することができました。統計数理研究所では、外来研究員用のIDカードを貸与していただいて、研究所の設備を利用しました。これらの設備としては、研究員室、ゲストハウス(Akaike Guest House)、ネットワーク、図書室、印刷室などがありました。特に、研究員室と宿泊していたゲストハウスは、毎日利用しました。対応教員となっていた中野先生や北川所長(当時)、そして、たくさんの方から様々なご配慮をいただきまして、快適で有意義な時間を過ごすことができました。

統計数理研究所では、私にとって興味深い研究会やワークショップが頻繁に開催されています。地方私立大学に勤務している私にとっては、時間的なことや予算的なことから、普段は容易に参加できるものではないのですが、このプログラムの期間中は、自由に参加することができました。このような環境の中で生活できたことは、とても良い刺激であり、貴重な経験となりました。例えば、ワークショップ(“データ縮約のトレンドを追う-PCAとSDA-”や“情報の可視化とソフトウェア”など)とSymbolic Data Analysisの勉強会に参加しました。また、3か月間は、自分でほとんどの時間の使い方を決めることができたので、いくつかの学会や直前に知ったカンファレンスに参加することもできました。

私がこのプログラムに応募する主な動機は、それまで行っていた研究に行き詰まりを感じていたことです。私は、統計データの可視化に興味を持って、対話的な統計グラフィックスライブラリを作成しながら、アイデアを具体化していました。しかし、時間が無いために、とりあえず実装して学会で発表した機能が増えたことによって、ソフトウェアが巨大化と複雑化して効率が非常に落ちていました。このソフトウェアを作りかえる時間が無いことを悩んでいました。そんな時に、中野先生からこのプログラムのことを教えていただきました。そこで、今後のことを考慮した設計を考えてソフトウェアを作りかえるという気持ちで、応募することを決めました。

3ヶ月間の成果としては、完全ではないのですが、ある程度、予定していたように作りかえることができました。このおかげで、その後の新しい統計グラフィックスのアイデアを実現することが以前よりも容易になっています。

ゲストハウスでの生活は、とても快適でした。私が宿泊を始める1ヶ月前の5月31日に開所式が行われたばかりの新しい施設だったということもあるのですが、統計数理研究所の研究員室まで徒歩数分という非常に近いということも、快適に過ごすことができた理由です。朝目覚めて、ゲストハウスで前日の続きのことを始めて、区切りが付いたら、研究員室に移動して続きを行う、という今思い出すと夢のような生活を送ることができました。また、ゲストハウスには、共用の自転車もあって、週末や夜の買い物にはよく利用させていただきました。

このプログラムへの参加が決まったときには、講義や学生の対応が無い3か月間をとて長い時間とと思っていましたが、終わってみると、とても短い時間でした。しかし、東京在住の卒業生や友人に会えたことや納得できるまで時間を気にせずにプログラミングを行ったことなど、普段の生活では不可能なことを行えたとても貴重な時間でした。このプログラムに応募するときには、学生のこと、学内の仕事のこと、家族のこと、などについていろいろと考えました。貴重な時間を過ごせたことによって、研究についてはもちろんですが、学生への対応や授業についても良い結果になっていると感じています。